



後人乃編つべきなるものとしり山ざれ考ハ別紙
あるナリ序よりこの書源乃事ハ一定一が
本部が第あよあうざるものとある所とあり又或
流りや治十帖も本部が能りあすとしり
は源氏物語ハ天竺に於て表すといふ
云々源十帖名とくその較と比ぶしり
考一又源氏物語乃理りうと人いし
より云々源氏表ハ世り何なるのやとれ世よ
と秘苑とするとかこならくそと心又ある所
乃心を所せばとある所をよひ後人乃流

ありともその理りうなり源氏物語なるなり
源氏物語後漢書と編りてとくとしり
娘曹大家がはくり傳せし御あうは源氏
中子れ流しる事あやをれと理りうあひぬれ
終りあづきしりごもくや源氏の書ハ存れ
案の書りり政天宮れ書号とくしり
乃上巻より十帖抄あり訂入奉り十二月晦日
り終りてけ云々源の書ハそのある正月一日
よりおころてとるしおとるやや言くれり并の
書ある流よハやうしり若櫛花見源氏

榮守とありし戸出奉り八榮守橋人法の御
宮産ふ八橋とあり榮守より死すと橋人と
おれなくびらり子と橋産野とおれなく榮守
や八橋といひらりそれ名うてはけしぐ
はの御とおれり奉りや世よ一を奉り八橋
なまじらひつむしとも御侍ともいふは後志
くもくはごめ終くとも也

雲々く世一

此巻の序よりつくる名は源氏に法御まよひの
うつくれまひらりららおらりて世とそしむて
やまごれまひらりやけ巻の正月一日よりけり
世れ上の十三と奉りあたる年源氏乃末
あぐく飛地とたりりま年まきく三のたり

あぐく正月はらららあさて

正月元日源氏の末れりあふへと式禮か
つれ年よりいぬごとけぬひをうけり也
一日やらひらり 正月一日寅れ一ととらん也

吾と水と百刻よもきして流りの道入付の一刻也
子をもとらふとらぬとみればまや

惟これ充ちゆうつあり惟これ秀しゆう されひでいし女はまよふ童どう

少く教えん上じやうゆりこれより父ちち弟あにれたたと大まの

名とゆしはよひりうとの立たちゆれまゝなりと

初めて文ぶんはりのせりつひとことり梅うめでん

出いで兵衛射しやうめくこころいやくやく切きめる意い持ぢ

ありて戸とりし入りて父ちちよりつゝ今も源氏げんじは

うらうはくちまゝのこころ

源氏げんじは源氏げんじなり 是こゝれと書かきあや誰たれも知しら

西宮御所

源氏物語の中へ源氏げんじありて名ハハツケす

ふれゆり今も是こゝれ源氏げんじは若菜わがなれん

乃すなはち源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

あゝ源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

の源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

つゞき源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

しつゝおぢゆり源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

あゝ源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじの源氏げんじ

五人侍長とつりてははれゆきと一の
後よ五比丘と名を井修りてゆ今れん惟秀が
洞修乃は修乃とく修二人とととまきより
ゆきとのまひ中しくおひまの佛も十二卒
乃うらけ五人のははれはのしきとつとれと
くを信はれが教もまきとくひとてつうてつ
しつとん井ききめとつりてつと也
は車とつりてつりもつてなけ 源氏の院也佛乃
修乃れたの身とまきつるつりこれよりまき
かいとん也津はけり出家ハ牛るう車

りのはれぬ井也
ありは院 兼在院いと津くは寺よは信
まきとつりゆぐりまきはまきよはぐりありて
山のは寺よりつりせまよとつりされ極れ山里
とつり今ありは院とハ兼在院れも也
いふれハ備ごうるべとつりまきとつりまき
いふれは出家のまきとつりまきとつりまき
らす備ごうるまきと也
いふれはまきとつりまき ありは院ハ修乃れ
ありはまきとつりまきとつり源氏ハまきハらりのお

りいりまもいづなれまふありはらられをこ
ろくまや

かみりあられとんてこつりま ことといた

ふみやうまやをさわさうりまはらららら

はらんとあつてあひりあられとありありを

信や

まらこや 建と書やまらふまや

ありまのまらあつては院のまら

まらうまら身とらるうま

源氏まや 金剛経偈之一切有為法

雲居抄 八

いんげん 夢幻泡影の如く露亦如電 無常作は是観

川多 若むを幻れまとなれまら何と現とまひ果へま

すくは月日れつとれまらおさめまらまら花

源氏ま若ら世れまらまらまらまらまら

んれまら海かやく利りするらまらまらまら

のまらなる理ともまらまらまらまらまら

安閑ままらまらまらまらまらまらまら

まらまらまら 羅を帰が誇り山静り 似天在日

長如少年

まらまらまらまらまらまらまらまら

乃ら教人の業れこの世をよき世にするは
ひうめまうやとの事や

きくおれ人をとりて世の事をするは

あつらひの院れん天下れ政道ハ保氏れ名一人を
せれりともかくかりますや 礼記曰守

在_レ海内

山_ノの_レは_レこ_ノら_ノやと ありて院山_ノ里_ノ又_レ記_ノ外_一

のよあり山_ノ外_ノと_レ保_ノ氏_ノの_レ名_ノい_レう_レう_レり_レは_レ物
あひ_レり_レや_レと_レあ_レり_レあ_レり_レり_レの_レと_レ世_ノを_レ守_レ
て_レい_レの_レれ_ノの_レよ_レは_レせ_レよ_レふ_レあり_レれ_レあり_レせ_レよ_レ

あつらひの院れん天下れ政道ハ保氏れ名一人を
せれりともかくかりますや 礼記曰守
山_ノの_レは_レこ_ノら_ノやと ありて院山_ノ里_ノ又_レ記_ノ外_一
のよあり山_ノ外_ノと_レ保_ノ氏_ノの_レ名_ノい_レう_レう_レり_レは_レ物
あひ_レり_レや_レと_レあ_レり_レあ_レり_レり_レの_レと_レ世_ノを_レ守_レ
て_レい_レの_レれ_ノの_レよ_レは_レせ_レよ_レふ_レあり_レれ_レあり_レせ_レよ_レ

い_レの_レれ_ノの_レよ_レは_レせ_レよ_レ

あつらひの院れん天下れ政道ハ保氏れ名一人を
せれりともかくかりますや 礼記曰守

あつらひの院れん天下れ政道ハ保氏れ名一人を
せれりともかくかりますや 礼記曰守

い_レの_レれ_ノの_レよ_レは_レせ_レよ_レ

あつらひの院れん天下れ政道ハ保氏れ名一人を
せれりともかくかりますや 礼記曰守

い_レの_レれ_ノの_レよ_レは_レせ_レよ_レ

ありぬんごあよつたやまのあぶらとくくくく人け
ア〜ん井と口知〜る人〜也おぼろ種後海記と
は系後よ〜ゆねたよ〜入りのけり〜れ海ハある
ありぬごあ〜る〜も〜て〜い〜んハ海氏れらり
う〜る〜てハ口知〜る〜あ〜る〜れ〜あ〜り〜の〜あ〜や
六修流りハ 海氏れね〜る〜あ〜や〜ら〜あ〜れ〜ら〜あ
乃ら流と知人〜して六系系極宇町とこあ地り
てちちつ〜る〜人〜と〜し〜は〜人〜す〜り〜せ〜る〜

世れあやろ〜せ海〜る〜ハ 海氏ハ万氏れたあやれ
〜〜〜りあ〜り〜く〜く〜也 漢書曰上〜為皇天

引下為慈慈又母母 書彙典曰彙二十有
八載載竟乃殂落百姓如喪考姓三年四
海過八音

〜〜おあ〜り〜り〜もあ〜る〜ふ 邪谷り待日詠
原上卓一歳一枯葉野火燒不冬春
風吹又生 じ〜附冥運かあちよかれ淋
惠連かまら卓一地産生し〜り〜句とあ〜り〜る
とあ〜ら〜め〜く〜は〜句よ〜つ〜り〜是〜く〜一畝とあ〜る
と〜が淋冥運か〜と〜め〜く〜死〜る〜べ〜さ〜井と音
あ〜せ〜る〜待れ句〜り〜り〜と〜つ〜り〜今〜れ〜ら〜あ〜よ

ようて死せらるゝはさこれありしや 湖島運が受れ若
りあおあうらうしうあやとんさうきあしもあうよ
はあれあいのあうらうのあうをいへるあうせのよ
あうらうしうあうらうや

あうらうせあうらうしうあうらう 惟香親とせと宵
てあうらうらうのせうあうとあうあうあうらうらう
し月あおあうらうてあうらうらうのあうらうせあうら
あうらうらうあうらうあうてあうらうらうらうらうらう
うらうあうらう今あうあうあうらうらう今あうあう
あうらうとせとあうらうらうらうらうあうらうあうらう

あうらうらうらうらうあうらうとあうらうてあうらうらうらう
あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
あうらうらうらう

あうらうらうらうらうらう 二人あうらうはあうらうあうらう
らうらうあうらうらうらうあうらうあうらうのらうらうらう
あうらうらうらうらうてあうらうあうらうらうらうらう
あうらうらうらうらうらうらうあうらうらうらうらうらう
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
あうらうらうらうらうてあうらうのらうらうらうらうらう
あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

きしつらぬれやわさしつらぬれ月乃

あしつらぬれおやこいんまうつ初や他ハ流石
流し我ハ流石は流石のやとまうつめしきるな
う今ハ流石は流石のやとまうつめしきるな
まはつらぬれ

あしつらぬれおやこいんまうつ初や他ハ流石
流し我ハ流石は流石のやとまうつめしきるな
う今ハ流石は流石のやとまうつめしきるな

あしつらぬれおやこいんまうつ初や他ハ流石
流し我ハ流石は流石のやとまうつめしきるな
う今ハ流石は流石のやとまうつめしきるな

あしつらぬれおやこいんまうつ初や他ハ流石
流し我ハ流石は流石のやとまうつめしきるな
う今ハ流石は流石のやとまうつめしきるな

あしつらぬれおやこいんまうつ初や他ハ流石
流し我ハ流石は流石のやとまうつめしきるな
う今ハ流石は流石のやとまうつめしきるな

あしつらぬれおやこいんまうつ初や他ハ流石
流し我ハ流石は流石のやとまうつめしきるな
う今ハ流石は流石のやとまうつめしきるな

合興奉乃之まなめくこぞうこまじ一あり
集カク乃やゆる山里れ後うはすまひみれど
保氏れ名つとれくサうりまふとある一保氏ハ
とまじとありめす也

保氏流少と云系流也 保氏れ名とまじり
おくのぞれまふと見とあまのふも
と也後まじりやうまてはくれも若れま
かり保とすといふんがため也

二系流ハ保氏ハ保氏乃
母桐壺乃父衣れあや後よ世のふりり

すもあまのり白き糸々れ文ハはまぬとやまひ
ありまのそれゆりふく白き糸々の文サ
あり

せうくへいふいあひと あり保乃相

あまのあひひまは世中と何今文よかともふん
むりりといふり信んこそ

あまのあひこそりかへぬまもまれ糸よ移念若そあま
うらまの保 保乃男れあましてあまがま
かまの保通とあまの保乃家と一保氏の
まのあまといふらぐありありまくも也

これと一らゝなれてハ 今世ハ世休とあるれハ
室無相のありて人ハ念よ角よ心ととめ
まねまじま室常任れ理と人あさうめ落め
あやうそき作れと信氏ののまよ也
五ののらうとみらてあうそくふうのすむ

此水大風空れ五とつら五大和合ととま
つぬ教教とつと死とつ地ハかく水かつら
火ハあさうかり風ハうどれ空ハくりらて人ハか
あう立大とあらとらればきあうつハま室た
深うえう也

はま一ぬらとらう 心一心け家平等して
房利のそとま念よ南とく十家地
依正あり也この一ぬら理とらうぬれハ地無天
孝盡羅可像ぬらまはまは方れ妙理とこれ
まに空相とらぬら大道と序すこれうとあがり
やうとらて一孝とらわう物とけうとま
のまら也

人れ世ハ縁ぬよううらるる友れゆめ
あうハ信らるる信氏乃空れまうとつま
得道して後ハは方とら縁ぬよううらる

治のりう愛れきく後くゆをくじく人まうあ
まハ徳氏をそよよの娘よむひそめひゆを
乃中文と考すまぬりも後李凡れ其まよ邦人
のりて植れ山甲よ後なると来遊女れ巻よ言案
治りつりて冬れはくくくゆゆおれ人れ
くぬくありしと酒女の名かのみけけし
まろしや

せろあきさハ 他はまゆとよむゆふよさうれ
こんや有為れ治はハ幻れくく化まてとと
や化れまの下んハ今とぞありしものよハくう

やうくありまや

ありし水のまう 論語日子在川上曰逝

者如新 夫不舍晝夜 涅槃經曰

人命不修 過於山水

はれまなる空らび虫のゆりし水のりこぬり

一大事れんえん 法華經曰唯為一大事因緣

故出現世としり法は實相れ妙理と一太

ましとれまふけ理とゆとてお家しつ

笑とそり衣とばあありとあつり丹をこま

おまれひハれと也 般若長徳がまうり

成佛と名はく平一釋仙傳の八は行格及して
凡て入る事七十二人とおぼしめし酒氏乃名
苑仙と名けて徳とくく長生不死の
之のいひよりよく治理と味之べ一昇玄經
曰道言神仙成真自然登天白日騰景
上造紫雲とより極よりよこれ天仙苑仙
乃類や楞嚴の中第六通外は仙人乃と
玄く十種乃仙人と流せよりは通とささく
て長生不死の身と名けし身は身は十六
海漢とくくめをれきめなり酒氏の名る

云々これも品身成佛の理と悟りて世と
流とくくして苑仙の八天仙苑仙とあり
たりとくくして般若燈論曰聲聞菩薩等
亦名仙佛於中最高者故已有二切
彼羅密多功德善根彼岸故名天仙
とより高き悟道人は品身成佛とくくと天仙
苑仙とくくして相なり
やとくくもいりんくもく 惟考是於かん也
とより高き悟道人は品身成佛とくくと天仙
苑仙とくくして相なり
中はのなるるす

燒時焼時の維維子子此此身身とす

東の露の肉と割れんきよとあまきめし
いよや秋の月夜の時維よとけり野火のり
来りしと廻り水とまてて火と消つ子とす
くひのりくと大智度論よゆ夜に露の肉と
割てありけり一井河舎はあり
傳へるいしと神ありて或は火を維ぬひれ下よ
本元は維ぬひれ下よとて煙の言ふたぬうて
東の露の肉と割れんきよとあまきめし
地とくはきよのり

舟の本は言ふことす火の麻屋下のきよとあまきめし

かりまらなくともまことなるをまてて若くはとくえん
以風とやうよはなとあまきめし大種の中よ風ハ秋
以とくとも揚上りてハきよとあまきめし
ていさとおろす乃知なると酒氏に言ハ秋とく
ゆてくとも以いさもまててけりいさもまてて
と歌くんあまきめし
今いしりてれれとあまきめし 惟秀のいさもあまきめし
てと酒氏に言ハ秋とくともまててけりいさもまてて
いさもまててけりいさもまててけりいさもまてて

もよそふハ舞舞思おとれ娘冷泉流女流と
よせ竹河れ虫よ冷泉院へ下り流り一入
文ハ切月春より生れおさる文と世二乃文
ハ流是所れと行りや
所れれ世やとありうぶきく
志ろと能れあふ正所まら説れあある世中
ものこれんよとてくたうあふまつく
冷泉流れはちけ弁とりつとせれをひやと
これといふよとけあふまつくや
世がこめいあふらふんよいあふまつくあれ

すうりこといふれ果よ卵ろえくで果ると
桑守くつ子流女いく世とのれくめてれ
さとうりうりあふまつくやとせしあや
まがく文られんすくくてはあふら流り
これ世のすりつとあふまつくや
於蓮物心世々之
まはあひま離れく立てあひれあふまつくや
いふ入る 教は字おひんドあふまつくや
人あふら流らあふらとてあふまつくや

あふらあふらあふらとてあふまつくや
涅槃経曰一切衆生悉有佛性如來常住

無二有^二變易^一とつら^二我^一がん性^二れ^一持^二ハ^一元来
不生不滅乃佛あり^二あま^一のく^二は^一衆^二よ^一らして

自在妙有也^一らう^二こ^一れ^二は^一性^二よ^一由^二ら^一く^二年^一く

と畏^二六^一道^二は^一流^二轉^一き^二り^一不^二増^一不^二減^一經^二曰^一即^二此^一

法身流轉^一五道^二說^一名^二為^一衆^二生^一即^二此^一法

身修^二新^一六度^二名^一為^二菩^一薩^二即^一此^二法^一身

及^二流^一盡^二源^一說^二名^一為^二佛^一とつ^二ら^一け^二カ^一ヤ

んれ^二由^一と^二ひ^一と^二世^一も^二ら^一づ^二ー^一我^二も^一は^二性^一具^二れ^一と^二身^一

と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

世^二も^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

種^二白^一法^二二^一者^二慚^一二^二者^一愧^二と^一つ^二ら^一慚^二愧^一ハ^二二^一字

と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

我^二が^一つ^二ら^一い^二由^一と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

も^二ら^一づ^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

也^一と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

と^二い^一ふ^二此^一の^二ら^一ま^二り^一れ^二ら^一ず^二と^一ら^二づ^一と^二い^一ふ^二ら^一あ^二ら^一ハ

淮南子曰墨子見練然而泣之為其可
以黃可也 以黑上

何やうやすげと

風をよきまじりて葉はまじりて何やうやすげ人此の
あはらうすまのよ

とじまじりてまじりて何やうやすげと
流りすやうくを理とあまめ流りすや

風とまじりてゆりて樹はまじりて何やうやすげと
本末空れりり

外道は因果とまじりて何やうやすげと
諸法はまじりてゆりて何やうやすげと

法は空理より遠く大業の空理は法は法は
因果よりまじりてまじりて何やうやすげと
相乃理は空理を衆も満く平等也去來生
滅れおなり吾無不二速悟一なるあり
本末空れりり又ハ第一空理在或ハ般若
乃本空ともまじりて此般若の空智ハ法は
得道のり也法佛空相乃妙理なり
この空理を信不交れり也法華經曰諸法
從本末希自常威初也 維摩經曰
成就一切諸法而離諸法相

川流これ
是の如くしものいふものよの葉ハ世の如く母とんをいふ
山の産主とめて きれきも名も一夢のここの
夕霧と春の多ひ 町よは産とつるあじのハ
ほ輝ぬがひつるさだまうでふりし人あう
は昨がうさう 山の産主の約まは法はらが
つとじる信は昨がうさう宮れ理とらする
あハ稀ぬる井と感かんじまうや
歎う喜き乃らまうのど 徳佛歎喜之眸まぶた
清きよくくととのの 冷泉院のちんや

巨勢 二十六

はくもくしものいふものよの葉ハ世の如く母とんをいふ
山の産主とめて きれきも名も一夢のここの
夕霧と春の多ひ 町よは産とつるあじのハ
ほ輝ぬがひつるさだまうでふりし人あう
は昨がうさう 山の産主の約まは法はらが
つとじる信は昨がうさう宮れ理とらする
あハ稀ぬる井と感かんじまうや
歎う喜き乃らまうのど 徳佛歎喜之眸まぶた
清きよくくととのの 冷泉院のちんや

きつしつりつるをくむゆふよて地こりぢら
りつりつり

まづくふむつらつらくへまはるる身とそん

まてとひまてとひ初やうわ陀磔砌れ朝

可今ハ世もいつくほりんとすまきくうまき

なつりつりつや

さつりつりつるれまらるるじすびそめぬん

天台止観曰煩惱是昏煩之法悩乱心神又

与心作煩惱令心得悩つりつりつりつりつりつ

おとじつりつりつりつりつりつりつりつりつ

雲居物 二十七

解なれはハ五欲乃りつりつりつりつりつ

つりつりつりつりつりつりつりつりつりつ

女弟文らつりつりつりつりつりつりつりつ

日挫楷枷鎖同繫周周難解極者

易開女鎖繫人染着根深各可得脱

とつりつりつりつりつりつりつりつりつりつ

本也周周とハ牢獄の本也これハつりつりつ

き易らうん女乃をを若れ煩うつりつりつりつ

のがさつりつりつりつりつりつりつりつりつ

聲香味觸比之五事禪定正障可欲

修定皆愈棄之とつり

川多小町

あつたてふしとて世中とていふされぬやうありこれ
花人のおの 汝仕を改たれたるや夕霧のたけ一葉の
まふらあまの敷こころのひつめあひぐさりし
んくおのれ敷束とつら夕霧のたけ一葉の
まふ通ひまをゆて父たれた使まくわかれ
おふはつらつとていふ人一人あり

つくりよりつらつとていふ人一人あり

冷泉院はるく親一信やまはれりともあはれ
は死のまゝ一息一まはれりして得るは是を

雲隱抄

二十八

明とておれよふありてまゝこ生とてくちお生
まゝこ業因よまゝおれく悪業よけ平けあふ
おれおれりしを明よりして生を明へおのあ
は性の故理すては海りあふよくおれり
くれしとて迷ふ所の煩悩業苦れとておれ
さとりてむるくとばは身般若解脱の三徳と
あるこれれとていふはすおの禪定よ徳と
はまは冷泉院おのまを記すあまや
あふひもくくわくおれりし人
あひる人もまゝる世中とていふとてすまふ人

きあとしあ〜くれゆ〜おあ〜て

のめや雲居の川原よふき鳴きとえぬ〜
山岸におれ降のた〜おきよも言ぬ〜
き〜の〜ぬ〜と〜て 黙然とハ物もい〜を釋
り〜を〜ら〜ぬ〜や

〜は〜て〜ま〜れ〜ば〜あ〜る〜や〜あ〜と〜を〜れ〜と〜な〜と〜ら〜
〜物〜は〜し〜も〜ち〜は〜き〜ぬ〜し かな物もあ〜
ま〜ハ〜食〜乃〜も〜し〜り〜ま〜ぬ〜し〜り〜ま〜ハ〜世〜乃〜つ〜ひ〜
あ〜ハ〜ま〜り〜今〜ぬ〜し〜れ〜し〜ハ〜わ〜す〜倍〜道〜明〜る〜ハ
田代よ〜り〜り〜ハ〜悲〜然〜と〜て〜縁〜定〜し〜入〜す〜ハ〜

り〜は〜喜〜禪〜悦〜れ〜食〜よ〜り〜て〜浮〜世〜ハ〜食〜を
あ〜ら〜ぬ〜も〜は〜形〜乃〜衰〜終〜ら〜ぬ〜也
あ〜ぐ〜れ〜し〜も〜さ〜す〜し〜も〜そ〜て 淨戒のハ〜れ
と〜も〜乃〜し〜す〜山〜に〜産〜ま〜ぬ〜也〜

り〜ゆ〜り〜火〜れ〜す〜し〜ゆ〜お〜も〜あ〜れ〜て 法華經曰三摩
無〜安〜猶〜如〜火〜宅〜衆〜苦〜充〜滿〜甚〜可〜怖〜畏
文選頭陀寺碑文曰 蔭法雲於真際
則火宅晨涼 法真際 實際也

衣〜が〜ろ〜乃〜玉〜り〜し〜め〜え〜る〜
法華經五百弟子ありこの喻あり

夜明けの光とともききて初まう紀之ひとあててまにほしうられ
 のふで衣笠と知りんあひもきぬ人ともある世なり
 けりて物知りひもなるとの緒に 花人にかねも
 ありすこそめは別りてつらまうけりか泣かぬ人の
 安彦^{あひだ}熱^{あつ}れとて物もたづなずかりてさなと
 ありてなかりり見ゆじしちりりともよくあはる也
引たて 月^{つき}の風^{かぜ}が谷^やのよきもよきこれの咲てくらむ相^{あひ}ひも解^と
 幸^{さい}ぬれ^ぬの鈴^{すず}いあひぬさるあまてたじ^た刀^{やいば}を^を箱^{はこ}ひもは
 大^おは^はの^の那^なれ^れ候^{こう}まと 蕙^{わい}内^{ない}大^{だい}は^はれ^れ也^や 中^{ちゆう}舟^{ぶね}入
 候^{こう}まと^との^の浮^う舟^{ぶね}の^の物^{もの}の^のま^ま也^や 山^{やま}の^の妻^{つま}入

蕙^{わい}乃^のち^ちの^のま^まよりて候^{こう}まよ^よ色^{いろ}の^のま^まう^うの^のう^うの^の舟^{ぶね}
 蕙^{わい}乃^のち^ちの^のま^まよりて候^{こう}まよ^よ色^{いろ}の^のま^まう^うの^のう^うの^の舟^{ぶね}
 那^なれ^れと^と人^{ひと}あ^あり^りま^まめ^めく 中^{ちゆう}舟^{ぶね}あ^あく^くい^いり^りて^てな^なり
 す^すく^くそ^そう^うて^てち^ちぐ^ぐと^とう^うご^ごお^おと^との^のあ^あひ^ひく^くち^ち
 あ^あひ^ひす^すあ^あり^りて^てあ^あり^りと^とる^ると^とう^うに^にじ^じう^うく^く選^{せん}保^ぼ
 と^とめ^めま^まる^ると^と也^や
 ち^ちや^やす^すじ^じと^とあ^あり^りて^てあ^あり^り 日^ひは^は乃^の物^{もの}あ^あひ^ひり^りは^は也^や
 あ^あれ^れと^と今^{いま}い^いら^らも^も涼^{すずか}く^くま^まる^ると^とあ^あ蕙^{わい}内^{ない}也^や
司^し方^{はう} 山^{やま}の^の海^{うみ}風^{かぜ}の^のう^うら^られ^れぬ^ぬ乃^のす^すく^くと^とあ^あり^りと^とる^るん
 う^うら^られ^れみ^みと 今^{いま}と^とれ^れも^も也^や 土^ち佐^さ院^{いん}中^{ちゆう}に^にれ^れと

は母はたはた娘むすめ弟あに香か敷し女に清きよやとどづこれ
出いるでるる文ぶんようららあまはまままはは信しんようつつととああり
みみここささん 今いまととれれ居いるるははたたおおののはは根ね要えい業ぎょう
敷しのの女に清きよ梅うめええのの出いるでるるよう今いまとと喜き文ぶんれれのの時とき
子こりり終しゅうりり人にんやや薰かほたたおおももててよよ少せう中ちゅうをを
娘むすめ定さだままととりりりりととてて業ぎょう信しんととああままはは子このの
ありありととととよよ何なにづづききららままおおりりよよ向むかふふよよああららままひ
めめははららのの水みづ涼すずくくららんんとと今いまとともも信しんをを
ははららんんととりりよよつつききくく信しんはは定さだままおおりり一いっ戸こととば
おおりりみみららりり信しんははあありり一いっひひののおおりりとと下した物ものとと

忠告一にあらざる也

二乃文書文一はくは丹波とさるなり

これ二の文はあまはくは丹波とさるなり今とれ
一二三乃文はあまはく明在中文は以後して
信はれ定のきめは孫也一文はあまはたは母
他はあまはく同出るとまら文よ立まら二文は夕
帯れおらる中のみとあはくはく信とさる
りまらふは出るとまら文一はくは信とさる
意中物の中よ元服一はくは信とさる
世はよと養われく二条院よあまはる白鳥

これ等の所々も二の事今よくきりし所
より二の事いふ事あるはありし事
も此の所々もいふ事あるはありし事
今又二の事いふ事あるはありし事
清忠の事もいふ事あるはありし事
此位ハこの事いふ事あるはありし事
をせ給ふ也

いふ事あるはありし事
今上れりやといふ事
らあ二の事いふ事あるはありし事

懐位の人を送る事ありし事

人れおふと事ありし事
三人れはさし見と事ありし事
季歴と事ありし事
乃此れ徳治りたりし事
休て周の事ありし事
法りす所は事ありし事
兄さし事ありし事
又の事ありし事
季の歴は事ありし事

室に周れ文王の昌乃子と發より子とを幸に
ありは河の般の世をひて周れ世とされりされ
は父れつごり弟と乃子よゆうんとあがりなれば
兄二人の懐てあつてあつてあつてあつて
せいとれりあし
李朝文徳をわらうははひてあし
すす一れ文の惟喬親王とて紀名虎が娘を
みれ孝ありしあや弟二れ文の惟仁親王とて
忠にこれ娘明子れりみりあは兄は惟喬
乃みこの引遠れて二の文は位よつさるや
あまのこふつこふつこふつこふつこふつ

惟喬のみこの文衣殿也惟仁のみこの後後れ
は弟の二の文は位よつさるや兄をなをて
弟れ位をゆりあをめりといひ今と乃はよを
二人の向殿は兄弟あはるあはるあはるあはる
せいとれりあしは例よひくははるあつて
とろありの回ゆづりこころとあつて 三は文白
とすすは回ゆづりまはりみり名とりは
めりあるよそれはいりあつてあつて
あまのこふつこふつこふつこふつこふつ
中よりあまのこふつこふつこふつこふつこふつ

あくゆたたりりりりり

花流乃は附より 先流氏ハすすやち流氏より牛車
乃宣とくありし母也よ太政大臣ハ附り花の
く葉よた上とて流氏其の号とくもあひた流
とせし世はつりしとらおこあひのつりはなよ
花流とハ流氏れ其の牛也蓋太政大臣とてハ内人
たり附りて世のつりしとらおこあひのつりは流
ハ附りしあひたしとく也又一系又今とて
さして花流とす白文は流よりとてあひて花流
乃は附り流はらとくはとくしとく也

二系ハきつりのちとて ありハ流氏とくもあひの
は娘母ハ内大臣乃女也とくもあひの流氏とくも
同後ハ流氏也通昔中流と号し流角ハ流氏也
白文ハ流氏とくも早流ハ流氏とくも二系流よとくも
世はらとてあひたしとくもあひのつりはら
白文ハ流氏とくもあひのつりはらとてあひ
ハ流氏とくも
今とてあひのつりはらとてあひのつりはら
白文ハ流氏とくもあひのつりはらとてあひの
もあひのつりはらとてあひのつりはらとてあひの

たれた乃ちなき
 夕暮六なきの母ハ惟光しむ後ご
 友重れ内侍也やう木乃母より白き部守
 幸むあひと第し香か教けうれ其み弟ていとぞ尸し行ゆる也
 本邦の伝書 端はた終しまり部守れ文ハ源氏げんじの書也
 信宗院をも弟也やきさうすの書よきせあ
 久由けは娘文の書とておのきと文部ぶんぶの書
 させあひて後ま母乃弟ていに記しるはひをま
 きう明あきられ中ちゆう文部ぶんぶしめこれしうさうし明あきら
 乃一ひと果は文ぶんれらうしうしあひて文部ぶんぶの書
 できと第し大だいおらとをそらうぶがしてまうしう

聖徳太子 三十五

まうき一人也
 さいさいのみごと 白文れ本也
 かつらりあひ志せきんとく 若志わかしたれい
 文ぶんれあふちぶがうきとせうしあふと志部しべの書
 信しんくびあひきをうと大おはまがらぶら
 中ちゆう其そのあうあひ志せとまらんとくわ
 のとととせうり也
 みくせうとせうり本とも 若志わかしよきと志部しべの書
 本ほんと信しんと本ほんりあひ志しうと志部しべの書
 かつらり本れ志とてうさうわりしとく

女二は女の東乃^{あづま}をなすくはさうしうけり

今とろ女二の女ハ母ハ友奉^{ともほう}に甘^{あま}ゆや寄^や本の

あま肉乃^{にくの}らとこやしく甘^{あま}たおと^た舞^ままうり

まふ飛^ひ香^か舎^{しゃ}れ落^{らく}のあ乃^の日^ひ一^いおれ^れまと^とあ

わのこゆり女二れまもあうらあべてり

いあ^いひで^ひ錦^{にしん}まうらく^くあべくもあびし

終^{はつ}らずとや東^{あづま}のま^まとハ小^こ中^{ちゆう}の候^{あひ}ま^まは

まう今^{いま}ハ奉^{ほう}あ女二れまもあ野^のれ候^あまも

あうらうのく^くなう^うのまも

